

## 福島大学発達障害児早期支援研究所活動報告書

所長 高橋 純一

### ○研究目的

本研究プロジェクトは、自閉症幼児を対象とした遊びの教室を展開することで、以下の目的を達成すべく継続した活動を実施している。①幼児教室（つばさ教室）で遊びを通じた幼児への発達支援を行うこと、②保護者教室で保護者への支援（子どもの行動の捉え方、就学相談）を行うこと、③学生ボランティアによる活動および教員養成としての教育活動の3点である。特に、2018年度においては、①と②について主に活動を実施したので報告する。

### ○研究メンバー

#### <研究代表者（研究所長）>

高橋純一（福島大学人間発達文化学類・准教授）

#### <研究分担者（プロジェクト研究員）>

鶴巻正子（福島大学人間発達文化学類・教授）

大関彰久（福島大学大学院人間発達文化研究科・特任教授）

#### <連携研究者（プロジェクト客員研究員）>

洞口英子（小学校教諭経験者）

工藤紀子（小学校教諭経験者）

### ○研究活動内容

#### 1. つばさ教室（幼児教室）の運営

##### 1.1. 参加幼児

医師により発達障害の診断を受けている幼児や診断は受けていないが発達面の心配のある幼児の計6名（兄弟を含む）が通年参加した。

A児 年少 保育園 2018年5月開始

B児 年中 幼稚園・他 2018年5月開始

C児 年中 保育所 2018年5月開始

D児 年長 幼稚園 2016年5月開始

E児 年長 幼稚園・他 2017年5月開始

F児 年長 保育所 2017年5月開始

##### 1.2. つばさ教室の運営

前期は5～7月、後期は10～12月に月2回（水曜の午後）に教室を実施した。残りの月2回は教室運営の準備の時間として、教材準備、ダンスや手遊び・歌遊びの練習を行った。

表1. つばさ教室の実施日程と内容（2018年度）

月日	内容
4月25日	おちたおちた ふうせんボール
5月16日	おちたおちた ふうせんバシッ
5月30日	おべんとうばこのうた・クイズ ふうせんバシッリレー
6月6日	おべんとうばこのうた じゅんばんにうごこう
6月20日	とんとんとんとん・クイズ じゅんばんにうごこう
6月27日	おちたおちた・クイズ じんとりじゃんけん
7月11日	おちたおちた わなげゲーム
7月25日	お楽しみ会 わなげゲーム・フルーツバスケット
10月10日	ダンス・おちたおちた ひらひらあそび
10月24日	ダンス・おちたおちた・クイズ はっぱをつくろうはろう
10月31日	とんとんとんとん・クイズ もようをつくろう
11月14日	とんとんとんとん もようをつくろうはろう
11月28日	おちたおちた カードあそび
12月12日	おちたおちた カードあそび
12月19日	クリスマスのかざりをつくろう 終了式

教室運営のスタッフとして、プロジェクト客員研究員1名（洞口）が主に担当し、学生ボランティアが17名参加した。学生ボランティアは、主に学部1年生（7名）であり、2年生（10名）も経験者として参加した。幼児一人に対して個別支援を担当する学生ボランティアを2～3名決めて、計画的・継続的に関わりを持つようにした。責任者として研究代表者と研究分担者が対応した。また、2018年度は学生も保護者教室に参加して、保護者との関わりをもつ時間を設けた。

スタッフおよび学生ボランティアは13:00に集合して打ち合わせを行い、教室は14:00～15:30に実施した。幼児および保護者が帰った後、16:00よりスタッフはミーティングを持って、各幼児の共通理解や活動の改善および発展を図るようにした。

### 1. 3. つばさ教室の活動

教室の流れとして、表2に示す。

例年同様に、幼児が入室した後に「自由遊び」を行った。幼児の興味にもとづいて、学生ボランティアとともに活動するものである。

「自由遊びの後、「始めの会」を行い、「今日の活動」に移った。「今日の活動」は、毎回異なる内容であり、スタッフおよび学生ボランティアが準備したものである（表1）。

その後、「個別学習」として、幼児の“書く”、“描く”、“見る”、“読む”、“手の操作”などの学習を図るために、幼児の興味に応じて教材を準備し、実施した。

学習の後に「おやつタイム」を設けて、“友達との場面共有”、“約束ごとへの意識”などを身につけられるようにした。

最後に、「帰りの会」を行って、教室を終了とした。

表2. つばさ教室の活動の流れ（2018年度）

時間	内容	活動のねらい
14:00	入室 ①出席カード ②おしぼり ③名札 ④持ち物	・できることは自分でやるように誘い、手助けの必要な場合は、「頼む」言葉を引き出す。 ・自分のバッグなどの持ち物は自分の机の脇に置かせる。
14:05	自由遊び	・遊具で遊びながら、大人や友達との関わりを広げる。

		・担当者が他児の名前を呼びかけたり、順番や交代の場面を持ったりする。
14:20	始めの会 ①呼名 ②今日の予定 ③手遊び・歌遊び ④クイズ・読み聞かせ	・幼児の椅子をホワイトボード前に準備しておく。 ・担当者が今日の「当番」の幼児と会を進める。 ・手遊び・歌遊びを一つ、絵本を一つ程度用意。
14:35	今日の活動 (運動遊び・集団遊び)	・幼児は自分の椅子を移動する。 ・友達との活動を意識させる。 ・活動にそった体の動き。 ・約束ごとへの意識をもたせる。 ・気持ちの安定を図る。
14:50	個別学習	各児童に応じた、描く・書く・見る・読む・手の操作などの学習を行う。 ・児童の興味を生かしながら援助する。
15:10	おやつタイム (保護者へのフィードバック)	・友達との場面の共有を図る。 ・約束ごとへの意識や落ち着いた行動を図る。 ・当番児童の役割を入れる。 ・お代わりは飲み物・食べ物各1回までとする。
15:25	帰りの会	・活動の振り返りや当番児童への称賛を行う。 ・次回の予告を行う。
15:30	さようなら	・挨拶をして、自分の持ち物を持って退室する。

### 1. 4. 幼児の様子の変化

A児—スタッフの個別の関わりを受け入れて遊んだが、注意が持続しなかったり、周りの様子に気をとられたりして、次々と遊びを変えたり

立ち歩いたりする傾向があった。好きなキャラクターの絵や色紙を切る・貼るなどの活動には興味を持って集中する様子があった。活動したことを覚えていてまたやろうとするなど活動や遊具への関心を持つことができた。

B児—初めは母親と離れることや他児との活動を嫌がり涙ぐむ様子があったが、徐々に抵抗感がなくなり他児と一緒に活動できるようになった。遅れたり変更したりすることを嫌がり予定通りに進めようとするが、状況を説明すると理解して落ち着いた。慣れない活動や体を動かす遊びに躊躇することがあったが、個別の誘いかけで取り組もうとしていた。

C児—個別の関わりを受けて活動に取り組もうとしたが、他児の様子に気をとられてふざけたり、スタッフに抱きついたりすることがあった。活動への興味関心が高く、体を使った活動や色紙を切る・貼るなどの活動に喜んで取り組んでいた。スタッフが仲立ちをして、他児と遊具や言葉をやりとりして遊ぶことができた。

D児—全体への指示を聞いて、やりたいことを伝えながら活動した。スタッフに促されて他児に言葉をかけたり、遊具をやりとりしながら遊ぶことができた。文字や数字への興味が広がり、読む・書く・数えるなどの学習に持続して取り組んだ。全体的に活動への取り組みや切り替えが安定してきた。

E児—アルファベットやミニカー、電車など興味のあるものはあるが、写真やキャラクターの掲示、他児が集まっているところなどは苦手で、拒否することが見られた。本児の場所や抵抗感を減らす活動の設定や誘いかけのタイミングを工夫して、興味が広がるように誘うようにしたところ、個別の誘いかけを受けて取り組むことが増えた。

F児—活動への興味関心があり、自分からいろいろな遊具で遊んだ。スタッフが仲立ちをして他児と遊具や言葉のやりとりをし、自分から他児に声をかけることもあったが、自分がうまくできない時にすねてしまう様子があった。全体への指示の途中で席を立ったり、ふざけるような行動をとったりすることがあったが、言い聞かせて待つと行動を修正していた。

## 2. 保護者教室の運営

### 2. 1. 参加保護者

今年度は5名が参加した。話し合いは前年度より継続している保護者にリードしてもらい、スタッフが話し合いを促した。フリートークの時間を設け、保護者どうしの交流が円滑に行われるようにした。

### 2. 2. 保護者教室の運営

つばさ教室の時間帯に保護者教室を運営した。教室運営のスタッフとして、プロジェクト客員研究員1名（工藤）が主に担当した。責任者として研究代表者と研究分担者が対応した。

### 2. 3. 保護者教室の活動

#### 2. 3. 1. 活動の流れ

教室での活動の流れは例年通りとした(表3)。

表3. 保護者教室の実施内容(2018年度)

時間	内容
14:00	集合・本日の内容の説明
14:05	「5分間のワンポイントのお話し」
14:25	本日のテーマ 保護者どうしの意見交換
14:30	子ども教室の参観
15:15	学生による保護者へのフィードバック
15:40	子どもとの再会、終了

#### 2. 3. 2. 「5分間のワンポイント講話」

「5分間のワンポイント講話」は、保護者教室で取り上げるべき内容(就学相談など)もあったため、毎行行ったわけではない。内容は以下に記載する。

- 1回目 障がい理解①:「障がい」とはそもそも何なのか
- 2回目 障がい理解②:条約のお話
- 3回目 障がい理解③:法律のお話
- 4回目 特別支援教育①—特別支援教育の法的根拠—
- 5回目 特別支援教育②—特別支援教育の教育課程—
- 6回目 遊びの発達
- 7回目 継続教育
- 8回目 継続教育②—福祉型大学の試み—

#### 2. 3. 3. 保護者どうしの話し合い

観察室から子どもの様子を観察した後に、子

どもの行動について「良かった点」を自由に記述してもらった。その後の保護者どうしの話し合いに用いる材料とした。

保護者どうしの話し合いでは、良かった点について話してもらった後に、子どもの普段の生活の様子について内容を広げた。保護者どうしの共感的支え合いが促され、話し合いが活発になった。

## 2. 4. 保護者の様子の変化

学生によるフィードバックの時間には子どもの活動の様子を具体的に聞くことができ、教材等についての要望も話すことができた。子どものよいところをたくさん話してくれることから、楽しみにしている時間となっていた。また、学生が話した内容から子どもに対する新たな気付きや関わりのかきかけを得ることができ、育児への前向きな考え方を支える時間にもなっていた。

参観後の話し合いや子どもの帰り支度を待つ間など、保護者同士で気軽に話せるようになった。前年度の良好な雰囲気が残っており、開始からすぐに保護者のラインができた。年長児やOBの保護者からもたらされる就学や入学後の生活に関する話は参考になったと思われる。それぞれの保護者の本音が聞かれ、涙ぐみながら話す保護者に声を掛け慰める場面があるなど、信頼し合いまとまりのある集団となっていた。年長児の保護者からは就学してしまえばこのような場が無くなってしまふことを残念に思っている、継続希望の保護者からは回数を増やしてほしいという意見が聞かれた。前年度よりもフリートークの時間を多く設けたが、それでもまだ足りないと思っている保護者もいたことから、自分の気持ちを吐露できる場としても親教室の役目があったことがうかがえた。

## 2. 5. 保護者アンケート調査について

保護者教室の最終回にアンケートを取得した。質問内容と結果を以下に示す。

① つばさ教室に参加して、お子様は楽しそうでしたか。

- ・ とても楽しそう 3名
- ・ 楽しそう 1名
- ・ 日によって波があった 1名

※ どのような活動が楽しそうだったか（抜粋）

- ・ 工作を皆でしたこと
- ・ ボールを使った活動や折り紙・切り絵の活動

- ・ 身体を使った活動
- ・ 個別課題の時間に、字を書いたり学生さん達とお話したりしたこと

② 教室はどうでしたか。

- ・ とてもよかった 5名

※ 保護者教室で参考になったこと（抜粋）

・ 就学の話、家での過ごし方、就労、進学の話が聞けたこと。

・ みなさんの育児に関する話や他の幼稚園の話が聞けたこと。

・ 学校を卒業した後のこと、同じような悩みをもったお母さん達と話ができたことはとても大きかったと思います。

・ 育児についての悩みなど聞いてもらったり情報交換したりして共有することで、またがんばってみようという前向きな気持ちになれました。

・ 悩みをいろいろな人に聞いてもらえて、どうするといいか答が得られた。

※ 保護者教室は話しやすい雰囲気が保たれていたか。

- ・ とても話しやすかった 4名
- ・ まあまあ話しやすかった 1名

※ 参加された保護者どうしで交流できたか。

- ・ とてもよい交流ができた 1名
- ・ まあまあ交流できた 4名

③ 学生によるフィードバックの説明はどうだったか。

- ・ とてもわかりやすかった 5名

④ 今後、より良いつばさ教室にしていくために、あったらいいなと考えられるお子様の活動について。

・ 日数を増やしてほしい。

・ 工作の時間は子ども達がみんな夢中で活動していたように思うので、工作の時間を増やすといいのではないか。

・ 自分の得意なことの発表や個別学習の発表など。

・ 読み聞かせなども興味をもってくれそうかと思う。

・ 個別のほかにも、友達と2人で何かを作り上げるような活動で、協力したり話し合ったりする力を伸ばしてほしい。

⑤ 今後、より良い保護者教室にしていくために、あったらいいなと望まれる内容や活動について。

- ・日数を増やしてほしい。
- ・特にない。日々困っていること、悩んでいることを話せる場があり、とても励まされていた。
- ・話す時間がもっとあったらと思った。
- ・今のままで十分充実していると思う。

⑥ その他、お気づきのこと。

- ・2年間参加させていただき、ありがとうございました。学生のみなさんも子ども達を温かく迎えて下さり感謝している。
- ・1年間ありがとうございました。

以上より、保護者の意識としては、概して、つばさ教室および保護者教室の内容に対して満足している回答が得られた。一方で、2018年度の参加者の特徴として、意見を言いにくい保護者が若干見受けられた。これは、保護者どうしの共感的支え合いを促進するためにも、今後、改善しなければならないことであろう。

### 3. 学生ボランティアに対する教育活動

最後に、教員養成も担う立場として、学生ボランティアの様子について述べる。

2018年度は、1年生7名、2年生10名が参加した。前期は、前年度経験している2年生を中心として教材作成や幼児への支援について1年生への伝達がなされた。後期からは、1年生がメインとなり(2年生は補助となり)、幼児への支援が展開された。

2018年度の新しい取り組みとして、学生ボランティアが保護者教室にも参加し、その補助を行ったことがあげられる。教員養成段階の学生にとって、つばさ教室で得られた経験は将来の教職を考える上で重要な役割を果たしている。

### 4. まとめ

本研究所の取り組みは、子どもだけ、あるいは保護者だけへの支援ではなく、それらを取り巻く環境をも含めた複合的なアプローチをとっている。その点で、幼児教室と保護者教室を同時に開催し、幼児への直接的支援はもちろんのこと保護者への支援も行っている。子どもの発達支援は子どもへの直接的なアプローチによってのみ成立するものではない。子どもの発達に関わるのは保護者であり、その支援を行うことも必要である。

今後、「子ども支援」、「保護者支援」、「学

生ボランティアへの教育活動」を主な活動として、関連機関とも連携しながら、地域支援を担うことのできる研究機関として展開する。